國學院大學学術情報リポジトリ

楚辭における「守」について：「九辯」を端緒として

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-05-23
	キーワード (Ja): 楚辭, 守, 無澤, 曲隅, 「守志」
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 黎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001673

論　　文　　要　　旨

学籍番号	223211	氏　名	井上　黎

論 文 題 目：

楚辭における「守」について―「九辯」を端緒として―

本修士論文は、楚辭において「守」とはいかなる営為であるかを研究し、楚辭の特質を明らかにしようと試みる論考である。以下に章ごとに要旨を記す。

第一章では、本研究の端緒となった「九辯」における「塊獨守此無澤兮」を論じた。「無澤」とは恩恵の無い境遇であると解釈されるが、なぜそれを「守」したのだろうか。そこで「無澤」を「守」しない衆人を「余」が如何に認識していたかを考察した。衆人は、際限の無い欲望を以て競い、「財利」や「爵位」といった君澤を求める。嫉妬心により「忠正」などの美質を美質として認めずに賢人を排斥する。さらに、規範に背き、讒言などの邪曲な手段を用いる。このような衆人の卑劣さを「余」は拒絶し、邪曲な手段を採ってまで求める恩恵など、私は要らない、と自己と衆人とを峻別する意図があるのではないかと指摘した。

第二章では、「哀時命」における「塊獨守此曲隅兮」を論じた。「曲隅」とは山の阿であり、人目に付かない山中の場所である。なぜそれを「守」したかという問題に対し、「哀時命」の表現を中心に考察して「余」の自信を読み取った。自分が容認できない世の中に迎合するよりも、自己の指針を曲げずに自信を持つことで、自ら自己を認めたいという思いから「曲隅」を「守」したのだと明らかにした。

第三章では、九思「守志」について論じた。まず、王逸がなぜ「守志」という題名にしたのかを考察した。忠貞を不変の価値として作中主体の心中で確立している点などを理由として挙げた。さらに「守志」の末に志は「守」しているだけでは蓄積されるのみで、到達目標は「守」の先にあると読み取れる表現がある（「志稿積兮未通」）。その到達目標は、志が他者に理解され、後世の人を感化するために発揮されることであると明らかにした。最後に、「守」して不変であるとなぜ志の目標達成につながるのかを述べた。不変というのは、心中に得た志が深いという証拠であり、外に発する情と内に秘めた質との一致、すなわち心の内外が一致した言動によって名声が広がり、志が伝播するのだと指摘した。また、七諫「自悲」の表現から、自分にも他者にも愧慙しない言動が目標達成に結びつくのだと明らかにした。

本研究を通じて、楚辭における「守」とは人生の指針を曲げずに自信を持ち、自ら自己を認めるための営為であると明らかにした。そして、作中主体が衆人と自己とを峻別し、憂いを懐きながらも「守」する点が楚辭の特質であると言えるのではないかと結論づけた。

キーワード（5 語）

楚辭、守、無澤、曲隅、「守志」